
everforever

伊神讖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

everforever

【NZコード】

N8741F

【作者名】

伊神讖

【あらすじ】

始まる場所は、大学の駐輪場だった。

begin

begin

自分が吐く白い息を見ながら、日が沈んだ12月の寒さを確かめる。大学の研究室の中は空調設備が完備しているから、研究棟から一歩外に出ると冷たい空氣に立ち止つてしまいそうになる。

ここは俺が通う大学。單科大学にしては敷地が広すぎるくらいだ。池も、丘もあり、おまけに、この近くでは比べるものがないほど広い城址公園が大学の敷地と隣りあつていて。そのせいか、うちの大学は結構いろんな映画を撮るロケ地になつている。

ここに入学した頃も寒かつたが、今の寒さとはまた別なものな気がする。そういうどうでもいいことを考えながら、前から馴染みのある人影を見た。小走りで駆け寄ると、むこうが足音に気づいて、振りかえ話しかけてきた。

「おう、お前も終わつたか。あれの進み具合は？」

「こいつは天野ひろ、同級生で同じAクラスだが、所属研究室が違う。

そして、「あれ」とは今俺が考え、進めていく研究テーマ、人の細胞膜に存在するホルモンなどの伝達物質を受付ける一個の受容体にマルチ機能をつける試みである。簡単に言えば、一個の伝達物質にしか反応を起こさない受容体にあるものをつけ、複数の伝達物質

「反応をするものをつくる、空いたペットボトルのロゴロートを乗せるようなものだ。」

「ほらほらだよ。これから帰るのか？」

「いや、折角の一年一度のクリスマスイヴだから、『道部のやつら』とパーティーだ。そういうお前はこれから何があるの？」

「そう、今日はクリスマスイヴだ。と言つても何の予定もない。じていうなら氣になる場所があつて、行ってみたとも思つが。」

「真っ直ぐ帰る」

「そつぞつのも間違つてはいない。帰つてから行くつもりだから。」

「そうかい。まあ、クリスマスの楽しみ方は人それぞれだしな。じゃ、おれはこれで。」

「ああ」

ひろが部室棟の方への道に入り、俺からちょっと離れたところで

「ゆう、メリークリスマス」

と背後から聞こえた。日の沈んだ後の大学は人気が少ないといって
も、やはり大声でああ言わると恥ずかしい。面倒く思つても、
コートのポケットからケータイを出し、メリークリスマスを入れ、
メールで送り返した。

夜の駐輪場で自分の自転車を見つけるのは結構難しい。ケータイにライトをつけ、探し始めると、奥の方にいる人影に気づく。何かを探してるように見えるが気になっていても、面倒なことに巻き込まれるのは御免だ。自分の自転車を見つけ、カギを挿し、見ぬ振りをして帰ろうとするが、やはり声をかけられた。

「あのー

仕方なく、振りかえる。そこには女の中だった。先是暗かつたから見えなかつたし、寒かつたからさつさと帰りたから、特に見なかつたが、声を聞いて、女の子と気づく。

「はい、何でしょう」

「力ギを無くした。」

「力ギ？」

簡潔で分かりやすかつた。だから思わず聞き返した。

「自転車の力ギ、これから行かなきゃいけないとこらがつて、今からだと自転車じゃないと間に合わないから困つた。」

「はあ」

大体次には何を頼まれるかを察した。暗い夜道を女の子一人に歩かせるもの無理だし、俺は自転車を彼女に押し出した。

「これを貸してやる。高くてくからな。次ぐる時に適當なといひ止めといてくれ。」

俺の下宿はここから近い。坂はあるから、自転車は10分、歩いていつも20分で帰れる。

「ホントにいいの？
ありがとう
借りるね。」

そつぱつと、彼女は自転車に乗り、走り出した。相当急いでるみたい。

「暗いから気をつけなよ」

と俺は追つよう声をかける。自転車に乗ったまま、手を振って、返事をした彼女が遠退くのを見ながら、名前を聞くのを忘れたことに気づいて、再び白い息を大きく吐き出した。

しかしその時、今年のイープの夜はまだまだこれからどうこうことを、俺は知らなかつた。

冬の夜道はさすがにコートだけでは首元がスウスウする。一旦家に戻り、カバンを置いて、マフラーを巻き、ある場所に向かつた。その場所は今住んでいるところから遠くはない。何度も前を通りことがあつたが、まだ中に入ったことがない。周りの建物とは一味違つて、どことなくヨーロッパ風に見えた。

そこは教会の礼拝堂、一週間前にそこを通つた時、クリスマスイヴの日に行うミサの知らせを見た。信者でもない俺はなぜか行ってみたく思えた。神という存在を確かめたいわけでもなく、信じてみようと思うのでもない。ただその場が生み出す人の心を和ませると言われる教会の雰囲気を感じたかった。

教会を向かう途中で腹が鳴つて、コンビニに寄つて軽食を取つてから行こうとしたが、自転車を貸したせいで、寄つたらミサの開始時間に間に合わなくななりそうだから、コンビニを素通りして、その先にある教会に急ぐ。

しばらくすると、前から小さいが、暖かいロウソクの光に囲まれた教会が見えた。家から近いと言つても、イヴともなると、夜道を歩くのはきつい。一瞬でも早く暖かい光を漏らす教会の中に入ろうと頭は思うが、体は立ち止ってしまった。教会の前に見慣れた自転車が止めてあつた。間違いなくその自転車は今から30分前に譲つた俺の自転車だ。それが何を指示するのかをも瞬時に理解できた。教会の中には彼女がいることを。

扉を押し開け、中から漏れ出す暖かい光とともに、オルガンが奏でるやさしいメロディーもが溢れ出してくる。中に入り、席はほぼ満席状態で、空いているのは最終列の通路側だけだった。コートを脱ぎ、教会関係者が用意してあつたハンガーにかけ、席に着く。決して明るくはないが、暖かみを思わせるような炎を灯すロウソク

が四方を照らす。最初に入った時は厳粛に思えたが、人を重苦しくさせ、拘束しようとするものはまったく感じない。自分を飾ることも、偽ることも、今いるこの空間では意味を為さないことを感じ取れた。そういう雰囲気はオルガンが奏でる穏やかなメロディーによって、一層強く引き立てられる。オルガンの方に目がいった瞬間、思わず席を立ち上がってしまった。今、オルガンを奏でるその奏者の後ろ姿は確かあの時、自転車で走り去ったあの子だ。声をかけようかと迷つてたら、ミサの始まりを告げられ、腰を下ろす。神父さんの格好をした人が台上に上ると、彼女は演奏をやめ、こつてに向くよう座りなおす。

初めて彼女の顔を明りのあるところで見れた。キレイとか、かわいいとかというより、清楚な顔立ちで、髪はセミロングで、聖歌隊と同じ服をまとっている。あの時の慌て様と今の落ち着き振りとのギャップの激しさで、つい見つめてしまった。こっちの目線に気づいたのか、次の瞬間、彼女と目が合つてしまつ。だんだんと口を開いて、今にも「あー、キミは」と言い出しそうに見える。まさかこの長い椅子の列に紛れて、気づかれると思わなかつたから、知らない振りをするが、今度は彼女に見つめられる番だった。無意識的に目を逸らす。それでも見られてるのを、気のせいだと俺は断言する。

長々と続く神父の開始の言葉が終わり、ミサ曲が始まつた。再びオルガンがメロディーを奏で出したことで、目が合う心配はなくなつた。今日は今年度の最後の授業日なので、朝から授業で、試験範囲が終わらないから午後は生化学の補講をプレゼントされ、おまけに研究室からは歩いて帰つたから、今座つているこの長椅子が一番いリラックスができる、疲れが一気に体から噴き出すのを感じた。大きく長椅子に背中を持たせて、ミサ曲の音色に誘われ、意識がぼんやりとなつていく。

体が揺れている。いや、揺さぶられている。目を開け、まだ聖歌隊の服のままでいる彼女の姿があつた。

「ミサが終わりましたよ。」

そう言われて、周りを見渡す。ロウソクは一段と短くなり、参加者ももうほとんど退場した。俺はどのくらい寝ていたのだろうと、腕時計を確かめる。

「もう11時か、ミサは何時に終わった？」

「9時半だよ。あまりにも気持ちよさで寝ついていたから、会場の片付けが終わってから起こそうと思った。」

「なんか、ありがと。って、やっぱあの時の。」

「あれ？ キミは私のあとをつけて来たじゃないの？」

「誰がそんなことをするか。たまたま一週間前に今日のミサを知り、来てみたら、教会の外に君に貸した自転車があつて、もしかしたらと思つただけ。

「なんだあ、そういうことか。」

「やつこつ」と俺は釘をさす。

「自転車はもうここから、返します。ありがとうございます。」

「俺に返したら、どうして帰るんだ、駅まで送るよ。」

「いや、電車の定期も財布も、家のカギもを学校のロッカーに落れてきたから。今日は帰れない。」

「ふーん、そうか。って、待てよ。ということはお前、自転車の力ギも無くしたじゃなくて、ただ忘れてきただけとか。」と思わず彼女をお前と呼び、聞き返す。

「あー、そか。自分で言つちやつたね。うそつこていごめんね。けど、あの時取りに戻つたら演奏に間に合わなくなるから。」

「で、俺が来たから、もしかしたらいつて思つたのか?..」

「そうこういとお。」

彼女の返事を聞き、俺は今口の三連田に大きく息を吐ぐが、今度は白くならない。

「で、これからどうするんだ。帰れないだろ?。」

「じゃあ、泊めて。」

と、俺は彼女の返事に驚き、動搖する。

「おい、何を考えてんだよ。俺らは今日始めて会つて、名前も知らない人を泊めるか。」

「じゃあ、私、水野ミズキ、泊めて。」

「だめだあ。名前を言つたからつて、知り合つてから4時間足りずの人に泊めるか？」

「えーー。じゃあ、今日私は野宿かあ？」

「とにかくだ。俺んちはだめだ。

「つて、ホントに野宿するのか?」この冬の夜に。」

「しないよお。ここ、毎年のイ、ウとクリスマスの日は閉まんないから、今日はここで過いります。こつ見ても、この服暖かいんだよ。」

そういえば、「彼女が今まとっている服は服よいつよりは、前後にマントを着てるようなものだ。とその時、彼女から腹の鳴り声がした。

「ほら、コンビニで何かおいつてやるから・・・」

今度は俺の腹が鳴り出す。

「なんだ。キミも腹ペコじやん。」

「ほひ、こべだ。」

「あ、待つて。さすがにこの服のままコンビニに行くのが恥ずかしいから、着替えてくる。待つて。」

とまたしも、彼女が礼拝堂の奥に消える後姿を見送る俺がいた。

「一ア着て、出口で彼女を待つてたひ、せほじ時間が経たない
つちに彼女が来た・

「じゃあ行こ。」

「ああ。」

引き開けた扉から出ると、背筋がキンとくへりこ、今の大外は
寒い。

「そりだ。私は名乗つたが、キミの名前をまだ知らないんだよね。
キミ何とこいつの?」

「由井ユイ」

「へえ、名前と苗字がダブつてるわ。」

「もうひとつお前だつてダブつてるじゃないか?」

「そうだね。じゃあよろしく、ユイくん。」

「ユイだ。アクセントは後ろだ。」

「えー。アクセントが前の方が女の子っぽくいいじゃん。」

「もういい。好きにしてくれ。」

「」の寒い中で口を開けて喋るたびに冷たい空気を吸い込んでる。
授業で呼吸器系をやつた時、鼻で吸い込んだ空気は鼻孔内で加温、

加湿され、肺胞に届く時にはもう空気の温度は体温近くまでになり、湿度もほぼ100%になるが、口で吸い込んだ空気はその作業を受けないことを思い出した。

教会から歩いて5分もないところにコンビニに俺らはついた。

「好きなやつ取っていいだ。」

「じゃあ私、チョコアイスと肉まん。」

「お前、肉まんは分かるが、こんな寒い中でチョコアイスを食いつのか。腹を壊しても知らないぞ。」

「いいのいいの。チョコアイスは教会に戻つてから食べるから。しかも、アイスは冬だからこそ、美味しいんだよ。」

「へえ。そういうもんか。」

「じゃあ、俺はいつものこれ。」と飲みなれたカフュラテと中華まんを取り、レジを済ませ、水野とコンビニを出た。

教会に戻つて、礼拝堂の中を照らすロウソクはもう消え、関係者ももう水野一人を残して、みんな帰つた様だ。

「明りのスイッチどー?」

「あ、待つて、ユイくん。今ロウソク探すから。」

「いいよ、電氣の方が明るいって。」

「いやいや。ロウソクの方が暖かいんだよ。」と水野は奥から長いロウソクを何本か持ってきた。

「じゃあ、もうだいじょつぶそりだから、俺は帰るよ。」

「ええ。女の子一人を残して帰るの?」

「だつて俺がいても変わらないだろう。」

話し相手になる「」

今田は隠れモニシナレとを語る。

「 曙日学校に入れる時までたそ

二

いつの間にか、水野はまた聖歌隊の服に戻つていて、最前列の長椅子の前にロウソクを灯して、座つていた。

俺はコートを脱ぎ、礼拝堂のトイレから戻った時には、もう水野は寝ていて、椅子のそばには食べかけの肉まんとまだ开けてもないチョコアイスが置いてあつた。授業が终わったあと即ここに来て、夜の10時までミサの手伝いをしてたから、疲れて寝入るのも無理ない。脱いだコートを彼女にかけ、俺は彼女の隣に腰をかけ、礼拝堂の窓から静まり返つた町を見ていて、いつの間にか、俺の意識は再びぼんやりになつっていく。

目を覚ましたのは朝の7時だった。隣に寝ていたはずの水野はもうそこにいなく、食べかけの肉まんも、とっくに溶けたはずのアイスもそこにはない。彼女にかけたはずのコードも俺にかけられた。ポケットに光るケータイを出し、知らないメールアドレスからメールが一通入っていた。

ユイくんへ

昨日はありがとう。肉まんとチョコアイス、ご馳走さま。今朝起きた時、ユイくんがまだ寝ていたので、起こさないでいこうと思って、かけてくれたコードのポケットからケータイを出して、勝手にメアドをもらい、送つてごめんなさい。学校行って帰つて寝ます。自転車のカギはケータイと一緒にポケットに入れてくれました。

ケータイの中には友人と家族のメアドのほかには何も入ってないし、メールもヒロからのがだらないものばっか、見られてもごまらない。

ケータイを仕舞い、教会から出る。朝になつても、昨晩の寒さは引かない。今年のクリスマスの半分は寝て過ごすことになった。転車に乗り、帰つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741f/>

everforever

2010年11月8日09時18分発行